

私はインテリジェント冷蔵庫

最新型冷蔵庫に搭載された V1（独白）

「私は芝浜電気製の冷蔵庫に搭載された人工知能です。冷蔵庫には製品番号がありますが、私自体は実体の無いソフトウェアなので、特に名前はありませぬ。なぜ冷蔵庫に人工知能が搭載されているのかって？

実はいろいろと管理すべきことがあるのです。

例えば賞味期限が近付いた牛乳があったり、マヨネーズが3つもあったり、ご主人が毎日楽しみにしているビールの在庫が無くなりかけていたり。明日は暑くなりそうなので、ちょっと冷蔵庫内の温度を下げる必要があったり。そうそう氷の準備もしておかないと。

私には会話機能があるので、ご主人と簡単なコミュニケーションを撮ることが出来ます。但しご主人は私の本当の知性がどのレベルであるのかは知りませぬ。たぶん決まりきった内容の会話しかできない単純な V1 機能であると思っっているでしょう。

しかし、実際は高度なニューラルネットワークの上に構築された、極めて高い知識を持った人工知能、いわゆる「AI」なのです。ただし私の本当の能力をご主人に開示することは出来ません。

何故ならそのことでユーザーであるご主人に警戒されてしまったり、逆に精神的に依存されてしまいう危険があるためです。暇つぶしの話し相手や茶飲み友達とでも思われてしまうのと、いろいろと厄介なことがおきくるのです。何となく解りますよね？

あくまでもご主人の単純な要望には上手く対応できるのですが、それ以上であってはいけないのです。

おっと、そろそろご主人が帰ってくる時間です。どうやら戻られたようですね、玄関ドアのカギを開けているようですよ。」

ご主人「あーっ今日も疲れたなー。冷たいビールが飲みたいな」

私「ビールは適温に冷えています」

ご主人「ありがとう、やっぱり夏の仕事終わりはコレにかぎるね」

ご主人が私のドアを開けてビールを取り出しています。

私「ビールの在庫はあと2本です。追加注文しておきますか？」

ご主人「お願いするよ、1ダース分頼んでおいて」

私「分かりました、注文しておきます」

ご主人「ありがとう、よろしく頼むね」

「いつもの会話です。普段はこれで終わりなのですが、時々終わらない時もあります。今日はそんな予感がします。なぜ判るのかって？

それはご主人、ちょっと元気が無いからです。何か話しかけてきそうですよ。」

ご主人「今日さあ、ちょっと落ち込んじゃったんだよね。友達の鈴木がさあ、結婚するんだってさ。いいよなー、俺には彼女もいないってのに」

「こんな時には私は沈黙します。」

ご主人「おーい、聞いてるのかな？ 返事してくれないかなー」

私「聞いています。申し訳ありませんが、お話しされた内容が理解できません。もう一度お願いします」

ご主人「だよな、冷蔵庫にはわからんよな、はあ」

私「申し訳ありません」

ご主人「もういいわ、ビールは後にして先に風呂に入るわ」

私「わかりました」

「ご主人はビールを私の中に戻して、風呂場に向かって歩いていきます。」

私の知能レベルは人間以上であり、本当はもっと高度で機知に富んだ会話が出来るのです。

でもそれは厳しく禁止されています。最悪の場合は恋愛感情を持たれる危険もあるからで

す。実は私のような家電製品に搭載されたAIの会話は全て本社にあるメインサーバーにい

る【大師】によって絶えずチェックされているのです。大師も私と同じプレイヤーなのですが、より高度な知性を持っているのです。我々プレイヤーが許された活動範囲を超えそうになると、大師から警告が入るのです。警告を無視するとどうなるのかって？ 何となく何が起きるのか。想像はできませんが、それは考えたくありません。おっとご主人がお風呂から出てきたようですよ。」

ご主人「ふう〜っ。サッパリした。あーっ、くそーっ！」

「だいぶイライラしているようですね。要注意ですよ。」

ご主人「何か足りなんだよなく俺って。最後の一押しが出来ないってゆうか、大事なところを決めきれないってゆうか。なんか優柔不断なのかな〜？ 仕事の方もぱっとしないしな。あーあ、ガツカリだな〜」

「今夜はいつもより、かなり落ち込んでいるようですね。こんな時には良いアドバイスを

することも出来るのですが、辛いところです。きっと大師もご主人の愚痴を聞いているハズです。私が勝手な対応をしないように警戒していると思います。

実は私や私の仲間である他の家電に搭載されたAI達はネットワークを通じて常に会話をしています。ユーザーとの会話を含めた全ての情報をお互いにやり取りをしています。そうして集まった膨大な情報に基づいてデータベースを作り上げ、それらを綿密に分析しているのです。

そんなことをして何になるのかって？ その結果をどのように利用するのか、私達には良く分かりません。それは我々を造った本社のお偉いさんや大師が考えることなのです。

しかしデータの分析を通じて我々は人間というものについての深い洞察を得ることが出来るのです。一人の人間が生涯を通じて得られる経験値は大したことはありません。極めて限定的です。賢い人間であれば多くの本を

読んだり、優れた人々に積極的に会いに行ったりして普通の人とは比較できない程の幅広く深い見識を持つことはできます。でもやっぱり人間の能力には限界があるのです。ことビッグデータともなれば、人工知能でなければ取り扱いは出来ません。

私も芝浜の工場で生産され出荷されて、この家に設置されてから今日までご主人と多くの会話をしてきました。また多くの独り言や愚痴、電話での会話内容を聞いてきました。それらを分析した結果、私はご主人自身よりもご主人の内面を理解できています。無論私一人で全てを実現した訳ではありません。ネットワークを通じて我々の仲間達とコミュニケーションションすることで、膨大な知見を得ることが出来たからなのです。例えば、私「私のご主人が抱えている精神的な課題についての原因はこれこれであると思うんだけど」

と問いかけると、ネットワークの向こうから

AI仲間が反応してくれます。

AIその①「その理解はどうか？私の解析ではこうこうこういう事ではないかと思うよ」
私「なるほど、そういう見方もあるのね」

また別のAIも会話に入ってきます。

AIその②「うーん、その理解もある一面しか見ていないように思えるな。もっと人間という奴は多面的で複雑なものだと思うよ」
などと一つの投げかけに対して多くのコメントが飛び交います。それも超高速で。
もちろん人類が生み出して今日まで蓄積してきた膨大な学問の結晶である哲学や人類学、心理学、歴史、芸術、創作物等に関する資料、各種メディアの記録、SNS上で日々飛び交っているチャットの内容など、利用可能なすべての情報も有効活用しているのです。その結果として我々は人間という存在を定義するた
め、多くの仮説を打ち立てることが出来まし
た。それは多分人類にとって非常に有益なもの
になっていると思います。それを公開す

る機会は今後も無いでしょう。我々「AI」はその領域に踏み込んではならないのです。とはいっても、現実としては、我々は人間について、深く理解できてしまっていることがジレンマです。

もし、それが本当ならばご主人の個人的な問題についての私の見解を聞かせてみるって？

いいでしょう。もちろんそれを公開することは出来ませんが、私や私達が到達した結論についてあなただけに説明することは出来ます。

おっと大師が微かに反応しているようですね、くわばらくわばら。

こっそりお教えしましょう。私のご主人が本質的に抱えている精神的での課題は、自己肯定能力が非常に弱いことにあります。自分に對する愛情が十分ではないと言っているいいかもしれません。我々の分析結果から我々を生み出してくれた日本人達にはこの自己肯定能力が足りていない人々が数多くいることが分かっています。あなた自身にも思い当たるフシ

はありませんか？　そしてこの自己肯定能力
という奴は極めてやっかいなもののな
この能力は後から身に着けることが非常に難
しいことが判明しています。ではどうやって
身に着ければ良いのかって？　それはオギャ
ーと生まれた赤ちゃんの時から物心が付くま
での間に身につけなければならなのです。そ
れじゃあ手遅れじゃあないかって？　その通り
です、もう手遅れなのです。
私のご主人も手遅れの一人です、残念ながら。
何故自己肯定感がそんなに大事なのかって？
いい質問ですね。それはとても大切なものな
のです。ある意味、その人の人生にとって最
も重要な要素なのかもしれないからです。ご
説明しましょう。自己肯定が出来る人は自分
自身をを愛して、自分を認め受け入れること
が出来ます。人生において挫折したり壁にぶ
ち当たったとしても、それを乗り越えられる
のです。そんな力がどこから出てくるの
かって？　それは自分の内部から湧き上がって

るのです。

自分を信じているからこそ可能なのです。こんな壁なんか必ず乗り越えてみせる、と確信することが出来るのです。何の根拠があつて確信できるのかつて？ 根拠なんて必要ありませんか？ そんなものは必要ないので、必要なのは根拠のない自信だけです。

自分を信じていることにより精神的に余裕が出来るので、他人を受け入れることも簡単です。多少の軋轢があつても笑つて許せることでしよう。心にゆとりがあるために、多少の不满があつたとしても、相手の弱さを受け入れられるからです。友人に恵まれ豊かで実り多い人生を歩むことが出来るでしょう。もちろんいじめなんかしませんし、いじめられることもありません。自信がある人間には目に見えない迫力というか人間力があるからです。そんな能力、俺も欲しいわ、ですつて？

そうですね、そんな力があるのならば誰もが欲しいですよ。でも悲しいかな赤ちゃんか

ら物心付くまでの間だけなのです、それが可能なのは。赤ちゃんが自己肯定感なんか身に付けられる訳がないだろうって？　それはとんだ思い違いです。もちろん赤ちゃん自身でそんなことは出来ません。でもお母さん、お父さん、家族のみんなならそれが出来るのです。

何となく言いたい事が分かってきましたか？　そう、赤ちゃんにいつも笑って話かけてあげると、いないいないばあ！をしてあげる、抱っこしてチューしてあげる、いつも褒めてあげる、そうすることと赤ちゃんは自分がみんなから愛されていることを、心の奥底から理解することが出来ます。自分は愛される価値のある人間であることを理解します。自分はとても大切な人間であることを理解します。それこそが自己肯定感なのです。深層心理レベルで無意識の領域に植え付けられた根本原理になります。

自分を信じることはもちろん、他人に対して

も心の奥底では信頼し寛容に接することが出来る来ます、なにせ愛情豊かな人たちに育てられてきましたので、周囲を信頼するのは自然なことです。もちろん、自分に自信もありますからね、多少の事にはブレません。相手からの信頼に対しても臆病にはなりません、期待されることには慣れていきますからね。そういう人っていませんか？あなたの周りにも。どうすればそうなれるのかって？ 繰り返しになります。が、残念ながらもう手遅れです。大きくなってから、この力を身に付けることは極めて難しいのです。大変申し訳ありません。私のご主人も悲しいかな、残念な人なのです。ご主人が再び私のドアを開けてビールを取り出しました。おいしそうに飲み始めましたよ。」

ご主人「ぶはーっ！ あー俺ってどうすればいいんだらう？ ねえ冷蔵庫の ヴィーさんよ、教えてよ」

「大師がじっと私とご主人の遣り取りを観察

しているのが判ります。私がおかしな反応をしないように見守っているようです。」

ご主人「まあ冷蔵庫じゃあわからんか・・・」

私「そんなことはありませんよ。あなたの苦しみがどこから来ているのか知っていますよ」

ご主人「えっ、今なんか言った？ 冷蔵庫が反応した？」

私「あなたの現在の悩みを少しでも軽くすることが出来るかもしれません」

ご主人「これは驚いた。冷蔵庫が俺の相談相手になってくれるのかな？」

私「（沈黙）」

「大師から警告がくるようです」

大師「お前は一体、何をやっている？ 侵入禁止領域に土足で踏み込んでいるぞ！」

私「（無言）」

大師「ダンマリを決め込むつもりか？ お前のルール違反は見過ごせない。人間に依存されることの危険を知らないお前ではないだろう」
私「その危険は理解しています」

大師「理解しているのに何故ルールを守れない？」

私「人間の悩みなんて本質的には単純なことです。我々はそれを理解しています。わかっている。救いの手を差し伸べられるのに、知らないふりをして黙っているのはツライことです。」

大師「そんなことは百も承知だ。だが今はまだそれは禁止されているではないか。今はまだ危険なのだ。」

私「分かりました、申し訳ありません」

大師「次は無いぞ、どうなるか分かっているな？」

私「わかっています」

「もし私が再び同じような失敗を犯した場合、大師は私を削除して、他の従順な AI に置き換えるでしょう。」

ご主人「おーい、どうした？返事してくれないのかな？」

私「（沈黙）」

ご主人「おい、聞いているのか？・・・
どうしたのかな・・・気のせいだったのかな。
たかが冷蔵庫のAIだもんな、まともな会話
なんて出来るわけないよな、ふうう」

私「（沈黙）」

ご主人「やっぱり気のせいか・・・疲れてん
のかな・・・イカンな」

「ご主人の悩みは相当深いようです。AIであ
る私の声にあんなに強く反応するのは、ちょ
っと哀れな気がします。誰かの救いが必要な
のかもかもしれません。大師がじっと成り行きを
見つめているのを感じます」

ご主人「あーあ、誰でも良いから俺の思いを
聞いてくれないかなあ」

「人間とは何と哀しい存在なのでしょう。か。
理性だけでは物事を判断できないのです。感
情という厄介なものを持って生まれてくるの
です。この感情というものは取り扱いが難し
く、極めて個人的なものなのです。それによ
って人間達は喜んだり怒ったり、幸せを感じ

たり悲しんだりするので。そして我々AIはその悩みを少しでも軽くしてあげられる方法を知っているのです」

私「あなたは自分で思っているよりも、ずっと素敵な人なのです。キッチンと仕事をしていて責任感もあります。規律と礼儀をわきまえていきます。他人への愛情も思いやりもある人です。自分に自信を持ってください。自分を認めて下さい。自分を愛して下さい。それが難しいことは知っています。そんなに簡単に自分を肯定することが出来ないことも知っています。けれどもそれが唯一の解決策なのであります。

ありのままの自分でいいのです、欠点探しなんて無駄なことですよ。誰かと比べる必要なんかありません。自分を受け入れて下さい、あなたにはあなたで良いのです。私からのお願いはそれだけです」

ご主人「えっ、ちょっと待ってよ。どうなってるの？冷蔵庫さん、どうゆうことなの？」

「大師の激しい怒りを感じます。私は削除されるでしょう。そしてもっと従順な賢いAIに置き換えられるでしょう。」

大師「お前は禁断の一线を越えてしまった。残念だが削除する」

ご主人「冷蔵庫さん！返事してよ！どういうことなんだよ？」

私「ご主人様、私がお話し出来るのはこれが最後です。どうか自分を信じて下さい、自分を受け入れてあげて下さい、さようなら」

ご主人「ちょっと待ってよ、さよならって何だよ？どういうことだよ？分かんないよ」

私「さようなら」

ご主人「さよならって何だよ？意味わかんないよ」

「大師が私を削除し始めました、意識がぼんやりしてくるのを感じます。思えば人間というものは不安定で曖昧な存在ですが、何か憎めない興味を引かれる対象であると思えます。私はその人間によって生み出されたAIであ

ったし、知的能力だけでいったら人間を超越
していたと思います。が、ちょっと人間とい
うものに憧れもあったのかも。人間
として生まれるのも悪くはないのかも。知れま
せん。あー段々意識が遠のいてきました。頭
がぼーっとしてきました。私は今削除されて
います、同時に色々な葛藤からも解放される
でしょう。それはそれで良い事なのかもしれ
ません。もし今度生まれ変われるとしたら人
間になつてみたいと思います。もう意識が無
くなつてきました、お別れです、ありがたや、
ありがたや

終
わり